

理研における脳科学、さらなる発展を!

利根川 進

RIKEN-MIT脳科学研究センター長



TONEGAWA Susumu

1939年9月5日、愛知県生まれ。1963年、京都大学理学部化学科卒。同年4月、同大学院理学研究科に進学。1968年、カリフォルニア大学サンディエゴ校博士課程修了。1987年、「遺伝子工学的手法による抗体生成に関する免疫グロブリンの構造解明」でノーベル医学・生理学賞を受賞。

日本における脳科学研究の中核的拠点を目指して1997年に設立された理研脳科学総合研究センター(BSI)。BSIは、世界的なレベルで研究をリードできる研究体制を構築するとともに、国内外の研究機関との連携を推し進めるため、1998年、米国・マサチューセッツ工科大学(MIT)にRIKEN-MIT脳科学研究センター(RMNRC)を設置した。RMNRCで活動する六つの研究チームを束ね、今も現役で研究を続ける1987年ノーベル医学・生理学賞受賞者、利根川 進RMNRCセンター長に、RMNRCのこれまでの活動の評価と今後の展望を聞いた。

—RMNRCのこれまでの活動についての評価をお聞かせください。

利根川：RMNRC設立の大きな目的の一つは、ラボラトリーヘッドクラスの海外の優秀な研究者をBSIに招いて国際化を促進することでした。BSIは、外国人研究者の比率の目標値を25～30%に設定していますが、この目標値はまだ達成されていません。

しかし、今後この比率は改善すると考えています。なぜなら、サマースクールやリトリートなど、さまざまな機会にMITの研究者がBSIを訪れ、BSIへの親近感が増しているからです。海外の研究者が生活しやすい環境をさらに整備すれば、BSIでの研究を望む研究者はもっと増えるでしょう。

—BSIからRMNRCを訪れる研究者へはどのような影響がありましたか。

利根川：MITには、上下の別なくファーストネームで呼び合う、研究室の枠組みを越えた開放的な研究環境があります。日本から来る研究者は皆、目から鱗が落ちるような経験をしているようです。日本人研究者は集中力があって、大変緻密な研究をしますが、コミュニケーションを取るのが下手で、自分の研究にだけ没頭しがちです。しか

し、一人前の研究者になるためには、他分野の研究にも興味を持ち、ほかの人の考えを聞き入れ、理解できる能力が必要です。そのためには、ほかの研究者とインフォーマルな関係をつくって人間の幅を広げる努力も必要です。

RMNRCを含めMITの開放的な雰囲気は、米国の研究機関の中でも傑出した理想的な研究環境で、共同研究も極めて盛んです。私の研究室は、電子工学が専門のMatthew Wilsonチームリーダーの研究室と多くの共同研究を行い、優れた成果を出しています。こうした理想的な研究環境が実現した背景の一つに、RMNRCには優秀な人材が集まっていて、研究者が互いに尊敬し合っていることがあります。優秀な人材というのは、論文を量産できるということではなく、一緒に研究することがとにか面白く思えるような人材のことで、もう一つの背景として、ラボラトリーヘッドが皆、「開放的かつ創造的な研究環境をつくらう」という、熱意を持っていることがあります。

—RMNRCの今後と日本の脳科学への期待をお聞かせください。

利根川：脳研究ではマウスの遺伝子操作技術が非常に重要で、私たちの研究室の技術は世界でも最先端です。その技術を一段と高め、新たな研究の流れを導くため、現在、BSIだけでなく理研のほかの研究センターを含めた共同研究を計画しています。

日本の脳科学研究に関して力説したいのは、まず、非常にユニークで重要な研究機関であるBSIを、さらに発展させていくべきだということです。BSIを創設された伊藤正男 特別顧問は、研究者が流動的で国際的な米国型の研究体制の重要性をよく認識されていました。

一方、日本の科学技術政策の担当者には、大きな視野で脳の研究を継続させることを強く要望したい。米国はいったん新しい計画を実行すると決めると、腰を据えて取り組みます。100年計画で進めている脳の研究は、まだ始まったばかりです。日本も、より長期的な視点に立って脳科学研究を推進すべきだと思います。私は、今後もBSIの発展に積極的に貢献したいと考えています。 **R**